

# ヘミングウェイとその「聖なるもの」

## 1 章 神の館の山へ

大 井 映 史

### 1. “The Killers”

“The Killers”の主人公を Nick であるとする読みの根拠は、Andreson との会合の後に、舞台が Henry's lunch-room に戻されるところにある。生まれて初めて Nick は殺伐とした事件に巻き込まれる。殺し屋に対する憤りがおさまらないうちに、続けて Nick は、すでにあらゆる抵抗を退け、ただ殺される時を待つ大きな男、元拳闘家の Andreson に対面する。そして、食堂に戻って、George や Sam との Nick のやりとりでこの物語は締めくくられる。なる程、この作品は Nick Adams に視点を置いて語られている。したがって、一般的解釈は“*The Killers*”を、若い Nick が大人の世界、現実へと目を啓かれるイニシエーションの物語だとする。焦点を Nick の敏感な魂とその悪の発見に置くのである。しかし、視点の設定が直ちに主人公を決めるものではないし、Nick が悪の発見によって衝撃を受けうろたえている、虚無的情况に投げ出されている、とは思えない。

Andreson に出逢った後の Nick は放心状態にあると言ってよいだろう。Bell に対しても、George や Sam に対しても、彼等に応える Nick の言葉は虚ろである。

“Did you tell him about it?” George asked.

“Sure. I told him but he knows what it's all about.”

“What's he going to do?”

“Nothing.”

“They'll kill him.”

“I guess they will.”

“He must have got mixed up in something in Chicago.”

“I guess so,” said Nick.

“It's a hell of a thing.”

“It's an awful thing,” Nick said.

(p. 80)<sup>(2)</sup>

Nick には自分が何と答えたらよいのかわからない。わかっていることは、自分には Andreson を救えないという事実だけで、この事実の前にはすべてが空しいのだ。Nick

はほとんど返す言葉を失なっている。どんなに勇気があろうと、一人の若者の手に負えるものではない現実が横たわっている。どうしようもない現実を前にして、ここでは、なる程力を失なった Nick が描き出されている。しかし、この世には人間の力の及ばぬことがある、という認識は、それだけでは何の役にも立たないのだ。

続けて、精神的動揺を伴って吐露される次の言葉が、Nick の心に焼きついた光景を明らかにする。

“I’m going to get out of this town,” Nick said.

“Yes,” said George. “That’s a good thing to do.”

“I can’t stand to think about him waiting in the room and knowing he’s going to get it. It’s too damned awful.” (p. 81)

Nick が思い出しているのは、Andreson がすでにすべてを知りながら、ただ “There ain’t anything to do now.” (p. 79) とくり返し、Nick には背を向けて壁ばかりを見詰めている場面である。Nick は、この Andreson の姿を思い出したくないからこの街を出よう、と言っているのだ。Andreson が殺し屋に殺されるのは時間の問題である。Andreson が殺されるのを、Nick にはどうすることもできない。Nick には、同じ街にいながらす術もなく、Bell の言葉を借りれば “an awfully nice man”(p. 80) である Andreson の死を迎えることができないのだ。だが、だからといって街を出ようとするのが一体何の解決になるというのか。Nick には自分がどうしたらいいのか、皆目わかっていないことになる。

自分の心に焼きつけられた光景から目をそむけることはできない。Nick の言葉に対する George の答えは、“you better not think about it”(p. 81)、というものである。この助言がこの物語を締めくくるとは、殺し屋をうまくあしらえる世慣れた George のこの言葉は、むしろ考えない方がよいにもかかわらず、Nick が考えざるを得ない問題を明らかにする。殺されることがわかっていながら、その死を待つしかない人間が存在している。Nick はこの問題に立ち返らざるを得ないのだ。物語の最終場面で明らかにされていることは、すでに Nick が Andreson と全く同じ問題を抱える立場にあるということだ。この食堂の時計は20分進んでいるのだが、正確な時刻を指させるために針を戻さねばならないように、Summit を出るにせよ出ないにせよ、Nick は、いつかは戻って Ole Andreson という存在に対峙することになる。<sup>(3)</sup>

Andreson は一心に壁を見詰めている。もちろん、壁は Andreson が取り組んでいるものの象徴にすぎない。壁は、殺し屋の暴力に屈する以外に道のない人生、Andreson の絶望を象徴するのだらうか。<sup>(4)</sup> 重い口をやっと開いて、Andreson は Nick にこう応じる。

“There isn’t anything I can do about it” (p. 79)。殺し屋が自分を殺すことについては、もうどうしようもない、と言うのだ。殺し屋がどんな奴か、誰なのか、Andreson は知ろうとはしない。決して脅しなどではない。Al と Max でなくとも、誰かが Andreson を殺すことに間違いがないのである。だから、警察に知らせても意味はないし、まして Nick にできることなどありはしない。Andreson は「体ごと」壁に向かって次のように言う。

“The only thing is... I just can’t make up my mind to go out.” (p 79)

外に出ることは殺されることを意味している。いや、正確には殺されることではない。Andreson は意を決して外に出ようとしているのであるから、自分を殺させることを意味しているのだ。ここに在るのは、絶望した人間ではなくて、たしかに「『死』と対決しようとする人間」である、が、しかしその態度は、それ程厳しく「他人の介入を許さない<sup>(5)</sup>」ものではない。Andreson は Nick の訪れに礼を忘れない“nice man”である。むしろ、彼は死それ自体はすでに受け容れているのであって、第三者には介入の余地がないところに在ると言った方がよい。だからこそ Andreson の孤独な姿は厳粛なものと言える。Andreson は死に至った己れの人生を振り返り、人間の運命を見詰めている。この壁は、いかなる人間にも最終的に死をもたらす殺し屋、人間の運命を象徴しているとは言えまいか。

Andreson は、人生の最後の体験、すなわち死に臨んでいるのだ。殺されるがままに殺されるのではなく、己れの人生になんとかけじめをつけて、それから殺されようとしているのである。Andreson は、死によって結着がつく人間の運命に対して、土壇場で踏みとどまって挑んでいる、と言える。人間が運命に挑む闘いはなる程絶望的なものかもしれないが、しかし、Andreson は闘っているのだから絶望しているわけではないし、未だ敗者ではない。Andreson は今もなお重量級のファイターだと言えよう。壁に対峙する Andreson は巨大である。Andreson の登場は、社会に幅をきかせる殺し屋の暴力、George や Sam の知恵、そして若い Nick の真摯な態度をも、そのすべてを圧倒する。そのすべてが、より大きな、人間存在の窮極の問題とでも言うべき枠の中に、捉えられなければならないものになるのである。死と隣りあわせた人間が限られた時間の中で、己れの人生を完成させるべく己れの運命に取り組む姿は、ヘミングウェイの作品においてはしばしば現れるものであることをここで付言しておく。

だから、Andreson に事の次第を説明し始めるや否や、Nick は Andreson の反応を受け取るよりも前に、自分の言葉に“silly” (p. 79) な反響が伴うのを聞きとるのだ。Andreson は何も答えない。途惑いながら、Nick はさらに言葉を重ねようとするが、わ

ざわざ殺し屋の様子をお伝えしましょう、と、ことわらなければならない程に彼は言葉を続けかねる心境になっている。彼に使命感を喚起した勇気や正義感が、殺し屋の暴力に対するあれ程の憤りが、Nick からすでに失せている。それは、Andreson がすべてを知りながら抵抗しようとしなから、だから Nick が若者らしい怒りを虚無感に変える、ということではない。Andreson が重い口を開いてぽつぽつと Nick に応えるよりも前に、Nick は Andreson の様子に彼の予想を裏切るものを、彼の想像を絶するものがあることを感知している。巨体をベッドに横たえ、ただ壁を見詰め続ける Andreson の孤独な姿には、それだけで Nick を圧倒するものがある。それ故に Nick は、所詮第三者としての知恵をしか伝ええない己れの言葉に、そしてただ勇ましいだけの己れの行為に、幻滅するのである。

壁のほかにも様々な象徴が Andreson をとり囲んでいる。彼は服を着たまま、枕を二つ重ねて横たわっている。彼の足は、ベッドからはみ出している。このことは、彼がすでに死から逃げ隠れできないことの暗示であろう。<sup>(6)</sup> また、彼の部屋は二階の一番奥にある。この部屋は、Andreson が最後に辿りついた場所であり、今、Al や Max の手が届かぬ避難所にもなっている。とすると、追いつめられた「どんづまり」というよりも、この部屋はむしろサンクチュアリを連想させる。このアパートの管理人は Bell、持ち主は Hirsch である。だが、Andreson を描く場面に多用される象徴や Andreson 自身の言葉を含めた暗示表現、その一つ一つを解明することよりも、ここで注目したいのは、そのどれもがこの場面にミステリアスな雰囲気醸し出すことに役立っているという点だ。<sup>(8)</sup>

この場面は具体的な緊迫感がおし進める前半部分とは対照的である。ここまで読み進んで初めて、よく喋りよく動いた二人の殺し屋、Al と Max がいかにも “a vaudeville team” (p. 77) と見えてくる。彼等は Andreson の登場を準備する前座を務めたにすぎないのだ。また、Andreson の部屋に足を踏み入れて立ちすくむ Nick は、今、いかにも小さい。Andreson が登場する前と後では、世界は Nick の眼前にその様相を変えて現れるのである。会ったこともない人間を殺そうとする殺し屋は己れの行為に意味を求めたりはしない。殺し屋が支配する世界に意味など無用だ。だが、ここで殺される側の世界が開かれる。殺される側に焦点が移って初めて、世界は意味を求められるものとなる。意味が求められなければ生も死もなく、善も悪も存在しえないのだ。Nick の前に、Andreson は意味が求められる世界を啓示しているのである。

Andreson に出逢った後の Nick はほとんど言葉を失なっていると言ってよい。Bell に対しても返す言葉を持たず、George や Sam に対しては Nick はつい今しがた目の当りにした光景をどんな言葉で伝えたらよいのか、言葉では言い尽くせない。Nick は George の問いに機械的に答えているだけだ。それ程 Andreson との会合は Nick にとって衝撃的なことだったのだ。Nick がくり返すのは、ただ “awful” という単語のみで

ある。

人間存在の謎に迫る時、そこでは悪の脅威と人間の力の限界とがしばしば発見される。たしかに、有無を言わず *Andreson* を抹殺しようとしている運命は苛酷である。しかし、*Nick* が *Andreson* の静かなる姿を前にして抱く感情は、すべて「聖なるもの」の発見に伴うものでもある。*Andreson* を包み込むミステリアスな雰囲気は、謎めいた暗い運命の必然を思わせるものかもしれないが、同時に、神の摂理の存在を希求させるものでもある。*Andreson* の孤独で巨大な姿に圧倒された *Nick* は、後、めくるめく目眩の中で、ただただ畏怖の念をもって、戦慄とともにしか *Andreson* を形容しえないのである。これはすべて、「聖なるもの」に対して抱かれる被造物の感情にほかならない。<sup>(9)</sup> 悪の脅威と人間の力の限界が発見される時には、表裏的に、「聖なるもの」の存在と人間の力に限りがあることを補うものへの思いが高められている。*Nick* は、このことに気付けるかどうかを最後に問われていると言えよう。

もちろん、壁に向かいあう *Andreson* の姿が何よりも厳として在ることを示す人間の存在そのものに関わる問題、その答えが示されているわけではない。ただ一つ言えることは、どんなに耐えられないことだろうと *Nick* がこの問題について考えないことにするとしたら、それは人間の運命が最終的に課してくる人間存在の窮極的な現実からの逃避でしかない、ということだ。*Andreson* は *Summit* へと流れて来ている。もろもろの峰よりも高く、神の館の山はそびえる。多くの民が終わりの日にはこの山へと向かって流れてくる。*Andreson* が取り組んでいる闘いは、*Nick* にもやがて来たるべき闘いなのだ。この街で、*Nick* は今こそ本当の勇気を試されようとしているのである。

## 注

- (1) たとえば、Cleanth Brooks, Robert Penn Warren ed., *Understanding Fiction* (2nd ed., New York: Appleton-Century-Crofts, Inc., 1943)に現れる解釈は、*Andreson* “who is already initiated” と “the process of the initiation, the discovery of evil and disorder, and the first step toward the mastery of the discipline”(p. 309) を経る *Nick* との対立関係においてこの作品を捉えている。また、石一郎氏も『ヘミングウェイ研究』(東京: 南雲堂, 1970)の中で、「『虚無と戦慄に支配されている現実』を作者が『設定してかかっている』こと、およびその現実の中にうごめく『敏感な魂』」(p. 77)に重要な点があると指摘している。その他 Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration* (Pennsylvania State Univ. Press, 1966) がある。
- (2) Ernest Hemingway, *The Snows of Kilimanjaro and Other Stories* (New York: Charles Scribner's Sons, 1927), p. 80 からの引用。テキストはこれを使用した。以下、引用の際は本文中に頁数のみを記す。
- (3) 時計の象徴性についてはアト・ド・フリース著『イメージ・シンボル事典』山下主一郎主幹(東京: 大修館, 1984) 131頁を参照。物語の前半、George, Sam, そして *Nick* が、事件の巻き添えをくって殺されてしまうかもしれない、この緊迫感を高めるのが頻繁に言及される食堂の時計である。しかし、この時計が20分進んでいるというのは実に間が抜けている。この時計は狂っているの

### ヘミングウェイとその「聖なるもの」

である。「相対的な時間や運命に対して、人間が隷属することを表す」(p. 131) のが時計だとしたら、この時計が正確でないことは、物語の後半、時計とは無縁な世界に身を置く Andreson を描く場面に重点があることを暗示していると言えるかもしれない。Andreson はすでに、この作品中ただ一人、少なくとも「相対的な時間や運命」に隷属してはいないのだから。

- (4) 高村勝治, *Ernest Hemingway*, 新英米文学評伝叢書 (東京: 研究社出版, 1964) 『壁』は……ここでは更に明確な絶望の象徴として使われている。」(pp. 84-85)
- (5) 瀧川元男, 『ヘミングウェイ再考』 (東京: 南雲堂, 1972) p. 101.
- (6) 『イザヤ』 28, 20 参照。
- (7) 「どんづまり」という表現は上掲両著に現れる。高村勝治氏は Andreson の絶望を指摘せんとし (p. 85), 瀧川元男氏は Andreson が置かれる「極限状況」を示すために (pp. 101-102) 使っておられる。
- (8) 瀧川元男氏は上掲書 100 頁で、ヤングの “the boy’s reaction to this somewhat sickening situation” という言葉を引用。その後半に着目して「この何となく胸のむかつくような状況」こそ問題なのだと言われる。そして Andreson を描く場面に醸されているムードが『死』と結びつくもの」だとする。
- (9) Rudolf Otto, *The Idea of the Holy: An Inquiry into the non-rational factor in the idea of the divine and its relation to the rational*. John W. Harvey translated. (New York: Oxford Univ. Press., 1977) 参照。
- (10) 『イザヤ』 2, 2 参照。